

お笑いトリオ「ハナコ」 岡部 大 (33歳) 早稲田大学 スポーツ科学部卒

1989年生まれ。秋山寛貴、菊田竜大と共に、2014年にお笑いトリオ「ハナコ」を結成。2018年にキングオブコントで優勝した。俳優としては、10月から日曜劇場「アトムの子」(TBS系)に出演。来年は「どうする家康」(NHK)で大河ドラマに初挑戦する。

<ボロボロの参考書 誇り>



越谷南高校イメージキャラクター
『オリ太郎』

◇ 打倒、能代工業

- ・秋田県秋田市出身
- ・「高校3年生の夏まで勉強しなかった。10対0でバスケットばかりしていた。」
- ・秋田市は能代工業高校(現・能代科学技術高校)のバスケ部が全国制覇を重ね、「バスケ熱」が高まっていた地域。
- ・自身も小学校4年生からミニバスケットを始め、中学、高校でも部活動に熱中した。
- ・身長173cm。バスケ選手としては恵まれた体格ではなかった。
- ・県立秋田高校では、全体練習が午後7時頃に終わっても、顧問の先生が体育館の照明を消すまで、居残ってシュートやパスを磨いた。
- ・自転車で1時間かけて帰宅し、食事、風呂、睡眠で一日が終わった。
- ・3年生最後のインターハイ予選では、キャプテンを務めた。目標は能代工を倒し、東北大会に出場すること。
- ・ベスト4まで勝ち上がり、準決勝で能代工と対戦。150点取られ、ダブルスコアで敗れた。「ボコボコにされた。日本一は、こんなにすごいのかと思った」
- ・部活を引退して抜け殻のようになった。大学入試が半年先に迫っていた。

◇ 初めての危機感

- ・中学時代は勉強ができた。定期テストはほとんど90点以上。入学した秋田高校は県内屈指の進学校。
- ・1年生の夏、大学受験レベルの校内実力テストで太刀打ちできず、数学と化学は100点満点中、10点台。2学期になると授業が理解できなくなった。試験はいつも赤点との戦いだった。
- ・インターハイ予選が終わると、いつも授業中は寝ていた他の運動部の同級生たちが、先生を追いかけ、質問するようになった。初めて危機感を覚えた。
- ・大学で何を学ぼうか考えた。腰痛や捻挫に悩まされた時にお世話になった整骨院や整形外科の先生が思い浮かんだ。
- ・スポーツトレーナーになることができる学科に興味を持った。
- ・入試の記述問題は今からでは間に合わないと思った。マークシート方式の大学入試センター試験(現・大学

入試共通テスト)に狙いを定め、2次試験が実技試験中心の筑波大体育専門学群と、センター試験と小論文で受験できる早稲田大スポーツ科学部に的を絞った。

◇ 暗記に集中

- ・勉強したのは、国語、英語、数ⅠA、生物、日本史。
- ・予備校や塾には通わなかった。夏休みは、勉強のできる友達と図書館に通い、小論文は国語の先生が添削してくれた。
- ・雪が降る季節になると電車通学になった。
- ・寝ると記憶が定着すると知り、風呂に入ってから寝るまでは暗記に費やし、翌朝は電車内で復習した。
- ・繰り返しめくった参考書はボロボロになった。
- ・「部活でカサカサになった手や履きつぶしたシューズを見ると、練習した実感がわいた。参考書も、これだけやったという自信につながった。」
- ・センター試験は、自己採点で平均9割の正答率だった。
- ・筑波大の実技試験ではトラックを周回する長距離走で失敗し、不合格通知が届いた。
- ・早稲田大は小論文に手応えがあり、合格した。
- ・「センター試験に絞ってひたすら問題集を解いたのが奏功した。実技試験対策の余裕はなかったが、記述問題などに手を広げていたら、センターで9割は取れなかった。」

◇ 悔い残らぬ努力 仕事にも受験の経験生きる

- ・上京後も当初は、お笑い芸人になるとは思いつかなかった。自他共に認める真面目な子供で、小中高と常に学級委員長を務めた。
- ・ただ、お笑い好きだった。高校の文化祭で、同じお笑い好きの友人と漫才を披露したこともあった。
- ・バスケット以外に熱中できることを探していた大学2年生の春、浪人した、その友人が早稲田大に入学した。
- ・「バスケットをやっていないのなら、一緒にお笑いをやろう」と誘われコンビを結成。お笑いコンテストで優勝し、3年生でワタナベエンターテインメントの養成所に入った。
- ・卒業前には、親に芸人になると告げていた。
- ・お笑い番組やドラマに出ている今の自分は、受験時には想像もなかった。でも、ネタ作りやドラマのセリフを覚える時に、大学入試で追い込まれた経験が生きていると感じる。
- ・「受験は、自分を成長させてくれるチャンスでもある。悔いの残らない努力で合格を勝ち取り、自由にあふれた大学生活を満喫してほしい。」